はじめに

日豪は過去半世紀もの間、緊密な関係を発展維持させてきた。はじめての出会いは今から一八〇年以上も前の江戸時代後期であるが、日本が戦後の復興、高度成長を遂げ、世界の経済大国になったその裏方として不可欠な役割を果たし絶大な貢献をしたのがオーストラリアである。この事実を知る人はそんなに多くない。現在日豪は緊密な経済関係のみならず、政治、安全保障、文化、交流の分野でもその親密度を増している。一〇〇以上の自治体がオーストラリアの自治体と姉妹関係を結んでいる。交流している学校は六五〇校以上にもなる。その他にも多くの組織、団体、クラブなどが継続的に親交を深め、行き来が盛んである。年間の訪豪者数はこのところ四〇万人前後であるが、ピーク時（一九九〇年代）には八〇万人以上の日本人がオーストラリアを訪問していた。

にもかかわらず、その重要性を考慮に入れるとオーストラリアの知名度はあまりにも低いといわざるを得ない。過去、現在、未来に渡って日本にとって死活的なパートナーについての知識、認識度が低すぎる。このことは、日本の将来を考える上で大きな心配事である。一般的に知られているコアラ、カンガルー、羊、大自然やビーチライフなどは、シンボル的にオーストラリアのアイコンではあるが、オーストラリアの国体、社会、国民生活、制度、文化、産業などについては、一部の人たちを除いてほとんど知られていないのが現状である。

二一世紀はアジアの時代といわれている。確かに、中国、インドをはじめとする新興国の経済発展は目覚しく、半世紀前に日本が体験した当時のことが思い起こされる。オーストラリアは、今日まで日本の発展に大きく寄与したように、今後もアジアの発展のために不可欠な貢献をしつづけるであろう。その核は、アジアの発展を支えるために資

源を供給することである。それができるのは、この地域では紛れもなくオーストラリアである。オーストラリアのみといっても過言ではないだろう。日本だけがその恩恵を受ける時代はすでに過去のことになった。

経済活動の基軸であり国富の尺度でもある鉄鋼生産は、一昔前まで欧米をはじめ日本が主体であった。しかし、今日では世界の生産量（約一六億トン）の半分を中国が作り出している。それに必要な原料である鉄鉱石や原料炭輸入の大部分をオーストラリアに依存している。日本は電力エネルギー資源のうち、一般炭を七〇パーセント以上、天然ガスを四〇パーセント以上依存しており、東日本大震災直前まではウランの三〇パーセントもオーストラリアから輸入していた。この震災では、東京電力の福島原発が大きな被害をこうむり、関東地域は電力不足に見舞われて計画停電まで実施された。電力不足が、経済活動や国民生活にネガティブに大きな影響を及ぼす。日本の国体を維持・発展させるのに自給率がほとんどない現実を直視して、長期的にエネルギー資源の安定・安全な確保を決しておろそかにはできない。日本の製造業を発展させた鉱物資源・工業原料もそのほとんどを輸入しなくてはならない。もちろん食糧資源もしかり。オーストラリアは、アジア諸国にとってエネルギー・鉱物資源、工業原料、食糧資源の不可欠な供給国なのである。

一七七〇年にイギリスの植民地・流刑地として始まったこの国は、捕鯨で経済を興し羊毛で発展させ、一九世紀中ごろのゴールドラッシュを経て、今日資源大国として確固たる地位を築いた。日本の二〇倍以上の面積を持ち、そこに二四〇〇万人の人が住む。人口は日本の六分の一であるが、その人口の大部分が海岸線の温暖な南東地域に集中している。この広大な大陸の大部分は不毛の地である。しかも世界で一番乾燥した大陸である。日本人にとっては、この地を訪れないとこの茫漠とした広大さは実感できない。

一人当たりの国民総生産は、日本の一・五倍で世界でも有数の豊かな国である。働くものにとっては大変優しく、民主主義の先進国である。平等主義、仲間意識、フェアゴー精神が、国是として尊ばれる。この国には自由が満ち溢

れている。

また、不公平、無謀な権威、抑圧、差別などから自由である。人々はのんびりしていてがつがつしない。少なくとも最低生活を保障する社会の仕組みができている。だから生活に対する不安があまりない。一方このことは日本人にとって、事なかれ、怠慢で覇気がないように映る。国としてのアイデンティティー、愛国精神の欠如と思われる。国の将来に杞憂する。これが現地生活の中で持つ印象であろう。しかし、世界でも最も生活しやすい、住んでみたい国と公私ともに認知されているオーストラリアである。

オーストラリアの第一印象について、筆者がはじめて彼の地を踏んだ約五〇年前と、筆者の息子が最近現地での生活を通して感じたものにほとんど大きな変化がないことを知った。それは、オーストラリアの広大さ、社会の自由さ、フレンドリーな国民の暢気さ、豊かさである。五〇年の歳月が経過しても変わらないことが国民性になる。ただ違った印象の中には、オーストラリアが白人社会から今では多民族、多文化社会に変身しているということがある。最も速いスピードで多民族化している。二四〇〇万人のうち二八パーセントが外国生まれで、世界の二〇〇カ国以上から移住し新天地で生活をしている。この国の歴史、文化、国民生活に多大な影響を及ぼしている。

両国の国内事情は大きく変化している。筆者がオーストラリアで生活していた一九六〇年代、一豪ドル四〇〇円以上もした時代から、円高が進み一ドル九〇円台になった。日本国内の製造業は繊維産業にはじまり、家電、機械、自動車、それにハイテク産業に至るまで海外進出を余儀なくされ、国内産業の空洞が叫ばれてから久しい。国内からの製品輸出が、進出した海外生産拠点からの輸出に多くが取って代わっている。

オーストラリアでも同じく製造業の空洞化が進み、その輸出は、先進諸国での貢献度が平均で六〇パーセントに近いのに二〇パーセント以下に落ち込んでいる。一方資源大国としての地位を確立し、資源輸出が全体の七〇パーセントを超えている。先進国の中で珍しく健全な経済発展を遂げている。二一世紀にはこのような環境の変化に対応し

て、日豪は五〇年来の伝統的な補完関係を、さらに進めた新たな協働関係の構築と強力な地域協力が求められている。

日豪両国は、赤道をはさんで北と南の端に位置している自由で、民主主義、市場開放経済という価値観を共有している先進国である。日豪関係はよりいっそう親密になり、環太平洋の平和と繁栄のため両国は緊密に協力していく必要がある。一九六〇年以降確立された日豪の補完関係はその後も強化され、両国にとって互いになくてはならない存在になっている。日本にとって、エネルギー資源、食糧資源、工業原料の最重要供給国としてのオーストラリア、オーストラリアにとって四〇年間以上最大の顧客（輸出先）であった日本。また、日本は長きに渡りオーストラリアで必要とされる家電、自動車、機械など広範囲な工業製品を供給してきた。経済を中心とした強固な補完関係が、その枠を超え、現在では他の分野でも進展している。

繰り返し申し上げるが、オーストラリアなしで日本の将来は語れない。それほどこの国が日本にとって重要なのである。だからこの国についてもっと知っていただきたい。オーストラリアを丸ごと知るために『豪州読本』を平成二三年に、『資源争奪戦時代』を平成二四年に、平成二七年には『迫り来る食糧危機』を上梓した。『豪州読本』ではオーストラリアの歴史、政治、経済、法律、国民性、国民生活、多民族多文化主義、社会福祉などほとんどの分野についてわかりやすく解説した。『資源争奪戦時代』では、オーストラリアの豊かな資源が日本の国運に死活的な役割を果たしている事実を詳しく披露し、今後の日豪関係の有様についても言及した。『迫り来る食糧危機』では、先進国の中で極端に低い食糧自給率の日本にとって今後とも安全・安心の食糧供給国として不可欠な役割を果たすオーストラリアの食の全貌を解明し、かつアジア地域での食糧安全保障のため日本とオーストラリアが果たすべき役割を詳細に検証した。

今回、日本にとってこれからもますます重要なパートナーになるオーストラリアを解剖し、日本がどのように対処すべきかを示唆する。まだ誰もあまり書いたことのないオーストラリアの明と暗を分析して、今後日本が注意することや参考にすることなどを検証する。オーストラリアが抱えている問題点に果敢にスポットを当てる。それは国体で

あり、民主主義であり、環境であり、青少年問題であり、また過度の外資・資源依存、脆弱な産業基盤、混迷する九の法領域、一律・一体経済への挑戦、ナショナル・アイデンティティー欠如などである。さらに、オーストラリア側からするとあまり触れられたくない先住民問題を解析し、今なお潜在する人種差別・偏見、白豪主義を検証する。そして、オーストラリアのＳＷＯＴ分析を通してオーストラリアの将来を見つめ、そのための提言を披露する。また、これまでの日豪関係を振り返り、その将来に対して警鐘を鳴らし、その中から、なぜ今オーストラリアにいっそう注目し、そのための準備、行動を取る必要があるのかを探査する。

振り返ると筆者は、日本からの訪問者が年間二〇〇〇人ほどの一九六〇年代に、はじめてオーストラリアに留学した。日豪関係が緊密化し始めた頃であった。しかし、日本においてオーストラリアはほとんど知られていなかった。そこで、オーストラリアを知り、日豪関係の発展に寄与するため渡豪を決意した。また、オーストラリアの人々に日本を知ってもらい、日豪の親善、友好関係を促進するため現地で豪日協会を創設した。その後オーストラリアの総合商社に勤め、同時にオーストラリアのひとつの州である南オーストラリア州政府の日本代表を長年務めた。日豪の貿易、通商拡大、企業誘致、観光促進、文化交流などの分野で尽力した。オーストラリアの政府で日本人が駐日代表になったケースは前にもなく、今後もないと思われる。半世紀に及ぶ公私ともにかかわったオーストラリア社会の内部、仕組みの中でオーストラリアの素顔、本音の世界に接することができた。これからの日豪関係のためにこの書物が何らかの役に立つことを願う。

最後に付録として、オーストラリア版トレビアの泉を加えた。話のタネになると思う。

二〇一七年六月

田中豊裕

豪州解体新書

―政治・経済・文化の変容と日豪関係―

目　次

はじめに …… i

第一章　悩めるオーストラリア …… 1

一　揺れる伝統的な価値観、国民性　1
二　脆弱な経済基盤　11
三　過度な純天然資源依存　16
四　選択肢のないアメリカ追従　20
五　さまよう青少年　25
六　家庭崩壊、いじめ、ＤＶ　28
七　環境破壊、崩れる生態系　32
八　歴史的汚点、先住民はどこへ　39

第二章　国体の行く末 …… 51

一　国家元首は、イギリス女王　51
二　立憲君主制　対　共和制　53
三　民主主義先進国の悩み　57
四　連邦制の功罪　62
五　筆者にもねじれの時期があった　68
六　政治と金　72

第三章　混迷する法治国家……77
一　一国に九個の異なる法領域　77
二　複雑な法律制度　81
三　裁判所、警察も州単位　84
四　メディアの内幕　86
第四章　一律・一体経済への挑戦……93
一　果敢な規制緩和　94
二　市場一体化イニシアチブ　98
三　高い労働コスト　101
四　アジア経済圏に呑まれる　105
五　自由貿易の進展　107
第五章　多民族多文化国家の試験台……109
一　急速な多民族国家への変貌　109
二　顕在する人種偏見と差別　114
三　多民族・多文化主義の今後　119
四　白豪主義の再検証　124
五　行き場のない難民　128

六　日本人の移住は？　134

第六章　オーストラリアの将来は？……141

一　共和制への誘い　142
二　国のシンボル　143
三　外交の行方　147
四　アジア・太平洋経済圏　150
五　オーストラリアはどこへ？　151
六　オーストラリアのＳＷＯＴ分析　156
七　アジアの世紀におけるオーストラリア　158
八　僭越ながら　163

第七章　日豪関係の行く末を占う……193

一　日豪の出会いから　193
二　オーストラリアは死活的なパートナー　196
三　日豪のこれから　207
四　未来永劫一蓮托生　211

おわりに……219
付　録　トリビアの泉　オーストラリア版……223
参考文献・資料……235